
詮ずる所

王手

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

詮ずる所

【Nコード】

N71410

【作者名】

王手

【あらすじ】

短編コメディ小説集です。更新は不定期、テーマは転々とします。唯一注意して頂きたい点と言えば、本当に時間を持て余した暇な方以外がお読みになると、時間を無駄にした気分になるところでしょうか。

カッブ 麵野郎 小南（前書き）

もうホント意味分かんないです。

カップ麺野郎 小南

「今日はシーフードでも食べるか・・・」

小南はいつも通り昼食の用意を始めた。

お湯を沸かしている間に、カップ麺のほうの準備をする。

フタを半分まで開けて中からスープの素とかやくを取り出し、スープの素を麺の上に振り掛ける。

ピー。

お湯が沸けたようだ。

お気に入りのキッチンタイマーを3分にセットしてお湯を入れた。

瞬間に寸分の狂いもなく、コンマ1秒の誤差もなく、タイマーのボタンを押す。

ここまで徹底するのは小南がカップ麺を3分ピッタリに食べる主義だからだ。

後は3分待つだけだ。

ホッと小南が息をつく

「今日も勝負だああ！」

突然、霧崎が窓から叫びながら乗り込んできた。

小南は困ったような、諦めたような態度で「今日は何をするんだ」と訊いた。

「今日はトランプの7並べで勝負だ！」

「!?!? 7並べは時間が掛かり過ぎないか」

何度も言うが彼のポリシーは3分ピッタリにカップ麺を食べ始める事。そんな長つたらしいゲームをやっていたらカップ麺を3分丁度に食べ損ねてしまう。

「どんな勝負でも受けてたつと宣言したはずだぞ」

「くっ・・・」

そういえば三日前、調子に乗ってそんな事を言ったような気がする。小南は軽々しく発言をしたことを後悔した。

「いいだろう。その代わりに、ルールはこちらが決めさせてもらおう」

「それは認めてやろう」

「普通の7並べのルールに加えて、一人一秒以内に出さなければ負けと言うルールを加える」

「いいだろう・・・当然、いつも通りお前が負けたらカップ麺は俺が頂くからな！」

タイマーは残り二分少し前を表示している。一人一秒ルールならば間に合う事は確実だ。だが時間以外に小南は霧雨に勝たなければ力ツプ麺を食べられてしまう。

昼食の自分のカップ麺を他人に食べられること。それは彼の誇りを傷付ける事と同意義なのだ。つまりこれは小南の生死が分かれる戦いなのだ。

7並べだが。

「カードを配るぞ」

この霧崎の発言を小南は笑った。

「な、何が可笑しい!?!」

「良く手元を見てみな」

霧崎は言われた通り手元を見て驚愕した。

「何い!?! 既にカードが配られているだ!?!」

「さっさと始めるぞ。7を出せ」

「先行は私のような・・・」

「では」

「では」

「ダイヤの6!」

「ハートの8!」

「ダイヤの5!」

「スペードの6!」

「スペードの5！」

見る見る内に各マークの並び数字が揃っていく。

「クローバーの9！」

「クローバーの4！」

「スペードの12！」

「スペードの1！」

「スペードの2！ スペードは終了だ！」

霧雨はそういつてスペードのカードを一瞬で片付けた。

「ハートの2！」

両者共に一人一秒ルールを守るべく考えないで直感でカードを並べていた。

しかし遂に霧雨は場の微かな違和感の意味に気付いた。

（こ、こいつ……。ダイヤの8を出していないだと……）

ハートシリーズを順番に並べる間に出来た刹那に霧雨の思考がフル回転する。

（自分が持つダイヤは9から12まで。つまり、小南がダイヤの8を出さない限り、自分は和了れない）

思考はまだ止まらない。

(しかし、それは逆に小南がダイヤの13を出せない事を意味しているわけだ……)

つまり

(こいつ何を考えている……?)

出せないカードが続けばパスをしざるを得ない。

霧雨が4枚の並び数字を持っている時点で、プレイヤーがパスを宣言できる3回分のパスは使い果たし、小南は負けてしまうのだ。

(負ける気ているのか……? ……!)

ハートを出し終え、霧雨の手札はダイヤの9、10、11、12だけになった。

「クローバーの1!」

「パス」

霧雨はこのターンではやむを得ずパスしたが、場のカードの空きを見れば一目瞭然。3回も霧雨にパスさせる事は不可能だ。

「ダイヤの2!」

「パス」

霧雨にパスさせられるのはこれで最後である。

(終わったな……)

その時。

カードを置いた小南の口元がニヤリと笑った。

(なっ!?)

「負けたのはお前だよ!」

小南はダイヤの8を置く。

「ま、負け惜しみも程ほどにするんだな! その手札では俺の9と12コンボは防げない!」

「できるんだよ!」

「何!?!」

小南は、霧雨が出したダイヤの9と反対側に一枚のカードを持っていった。

ダイヤのエース。

「.....まさか!?!」

「その通り! 7並べの特殊ルールで、マークの片方どちらかが揃った時に、その反対側は7とは逆、つまり! ダイヤの13から置かなければいけないのだ!」

霧雨が場を見れば、空きの残りはダイヤの10と13。霧雨の手札は101112である。よって

「パ、パス」

霧雨のパス宣言と同時に、もしくはそれよりも早く小南の右手が空を切った。

ダイヤのキング。

小南がトランプを箸に持ち替え、カップ麺のフタを開け切った。

ピ。

「丁度三分だ。頂きます」

カップ麵野郎 小南 2 (前書き)

まさかお気に入り登録して頂ける方がいるとは思いませんでした
笑

カップ麺野郎 小南 2

「今日は豚骨でも食べるか・・・」

小南はいつも通り昼食の用意を始めた。

お湯を沸かしている間に、カップ麺のほうの準備をする。

フタを半分まで開けて中からスープの素とかやくを取り出し、スープの素を麺の上に振り掛ける。

ピー。

お湯が沸けたようだ。

お気に入りのキッチンタイマーを3分にセットしてお湯を入れた。

瞬間に寸分の狂いもなく、コンマ1秒の誤差もなく、タイマーのボタンを押す。

ここまで徹底するのは小南がカップ麺を3分ピッタリに食べる主義だからだ。

後は3分待つだけ。

ホッと小南が息をつく

「今日も勝負だああ！」

突然、霧崎が床を突き破り、叫びながら乗り込んできた。

「・・・今日は何をするんだ？」

「今日はこれだ！」

霧雨が取り出したのは 折り紙だった。

「？ 折り紙？」

「その通り！ 今日これから折り鶴の早折り勝負をしてもらおう！
一羽を折るスピードを競うのだ！」

「くっ・・・それは・・・」

小南が言い淀んだのはこの勝負は、ポリシーを守る自分にとって圧倒的に不利だからである。

一羽を折るタイムアタック制の勝負は、戦い終わった後に丁度3分という条件を満たしにくいのである。
とって遅く完成させては勝負に負け、カップ麺を食べられてしまう。

小南は悩んだ末、勝負内容の変更を提案した。

「先に5羽作った方が勝ちにしないか？」

「俺は構わんぞ」

霧雨は折り紙を5枚ずつ配りながら手が疼くのを我慢していた。

（果たして折り鶴の造形師と恐れられた俺に勝てるかな？）

「では」

「では」

二人の手が一齐に動き出した。

霧雨は紙を素早く二回三角に折り、折り鶴の基盤を築いた。

2秒も掛からない早業である。

霧雨はそこから慣れた手つきで一瞬にして一羽を作り終えた。

(自分でも驚くこのタイム、簡単に抜かれ・・・何!?)

霧雨が隣を見ると、既に鶴が2羽完成して、小南は3羽目に取り掛かるところだった。

(馬鹿な・・・)

その後も目にも止まらぬスピードで鶴を完成させる。

(夕、タイムは・・・?)

霧雨はセットされたキッチンタイマーを見る。

(これは!?)

開始時には1分30秒あった残り時間が、小南が3羽目を完成させた瞬間に36秒になった。

(平均18秒!?)

驚くべきはその製作速度だけではなかった。

一羽を折るスピードは18秒、つまり5羽折り終わるときには丁度、1分30秒を使いきる形になっているのだ。

(これを計算して設定を5羽にしたというのか!?)

ポロツ・・・

!

小南が折っている最中の鶴を落とした。

大幅なタイムロス。

しかし小南は焦ることなく拾い上げ、残りのパーツを折り終える。

霧雨がタイマーを見るとカップ麺の3分まで9秒を切ろうとしていた。

(遂にこいつのプライドをへし折ることができる・・・!)

霧雨が負けは確信したものの、ある意味の勝ちを目前に控え、そう思った瞬間

小南は笑った。

!?

その折り鶴を折るスピードは、先程の18秒ペースの比ではなかった。

(まだ本気を出していなかったというのか!?)

光の速さでそれは作られていく。

余りの速さに、逆にスローモーションを見ているかのようにだった。

胴体、翼、尾、そして首。

折り終わった鶴の本体は大空に羽ばたくように翼を広げ、頭が出来るとそれはまるで生を受けたように輝いた。

霧雨は（元々無かったが）霧が晴れた気がした。

目の前には立派な折鶴が5羽、佇んでいた。

ピー。

「3分丁度だ。頂きます」

カッブ麵野郎 小南 2 (後書き)

これを書いた後の脱力感は計り知れませんが、
ストレス解消にと思い切り書いていますが、何、この三文芝居・・・
。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7141o/>

詮ずる所

2010年12月2日17時43分発行